

音楽科

甫出 頼之・中村 恵美子

1 研究主題との関連について

音楽科では、「音楽を通して、世界をより深く理解するとともに、他者を尊重しともに生きる姿勢を培い、人生を豊かにする子供」の育成をめざす。そのために、多様な文化・価値観が反映された音楽を体験することによって理解を深め、自分自身や他者と対話をしながら音楽や音楽とのかかわりについて考察し、その意味や価値を自ら見つける学習活動を大切にしたいと考える。こうした学びを通して、子供が音楽を媒介として自他の存在を見つめ、よりよく生きようとする力を育んでいくことを期待している。

このような学びの在り方は、現代社会の課題に深く関わっている。国際化や情報化の進展に伴い、人種・民族・言語・宗教・文化・価値観等の多様性がますます顕在化している現代においては、日常生活や職場などの様々な場面で、明確な正解が存在しない、複雑で曖昧な課題に向き合うことが増えている。そのような中で、共生社会の実現に不可欠な共感力や、自他を尊重し共に高め合う力を身に付け、多様な他者と協働しながら想像的に問題を解決することが求められている。音楽科の学びは、まさにそのような力を育む基盤となるものである。

スワニック（2004）は、音楽について「人間という種族の歴史と同じくらい古い歴史を持つ対話の様式であり、自分自身や他の人々に関する考え方を、鳴り響く形式の中で明確に表現する手段」であると述べている。また、「対話として、私たちの自分自身についての理解や、私たちを取り巻いている世界について理解を深め、人生をより豊かにしてくれるという、重要な役割」を果たす、いわば、「私たちが知る、考える、感じるための一つの方法」であるとも述べている。このことは、音楽が演奏者と聴き手、異なる文化や時代を生きる人々の間で相互理解を促し、感情や経験を他者と共有し、文化的文脈を理解する手段となることを示している。今井（2019）は、音楽教育は音楽を通して様々な知の世界とつながり、考え感じることによって自己を省察し、変容させる営みであると述べている。つまり、音楽科教育には、音楽と関連する文化的・社会的・歴史的な知の世界の探究と、音楽的経験から得られた思考や感情の振り返りによる自己理解と成長を促すことが求められているといえる。そして、このような学びの積み重ねが、多様な他者と協働しながら共感力や自他を尊重し共に高め合う力を培い、誰一人残さない共生社会の実現へとつながっていくのである。

音楽科でめざす子供の姿	音楽科の授業づくりの特徴
音楽を通して、世界をより深く理解するとともに、他者を尊重し共に生きる姿勢を培い、人生を豊かにする子供	・音楽体験を通して自分自身や他者と対話をしながら、音楽について思考する。 ・音楽を通して多様な文化や価値観を理解し、他者を尊重し共に生きる姿勢を培う学習を重視する。 ・仲間と協働し、互いの表現を尊重しながら音楽を創り上げることで、協働する喜びと共生社会の基盤を体験的に学ぶ。 ・音楽の文化的・社会的・歴史的背景に触れ、そこから得られる気づきを自己理解や学びの深化に結びつける。

2 本年度の研究計画

(1) 研究の経緯

昨年度まで、広島大学附属東雲小学校・中学校は、「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」を「授業構想力」「授業実践力」「授業分析・評価力」の3つのカテゴリーに基づいて規定し、授業実践を通して、規定した資質能力の妥当性について検証してきた。

小学校音楽科においては、日本の五音音階を感覚的・体験的に捉え、旋律の動きから呼び起こされる日本の風情を味わいながら、音楽表現することを通して、日本の五音音階に親しむことができるための授業を構想し、実践を通して教師の資質能力の妥当性について検討した。結果、児童は、西洋音階と日本音階の違いに気付き、さらに都節音階と民謡音階の旋律の動きから日本の風情を味わうことができ、五音音階で、「竹取物語」の原文との関係を意識しながら音楽をつくることができた。さらに、グループごとにわらべうたのリズムを援用して旋律をつなぎ、それを学級全体でつないで1つの音楽につくり上げることができた。児童が五音音階を感覚的・体験的に捉え、旋律の動きから呼び起こされる日本の風情を味わいながら音楽表現をすることを通して、日本伝統音楽のよさをより深く味わうことができる授業を開発することができた。

前年度の研究の目的は、「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」とはどのようなものかを検討することであった。そこで、「授業構想力」「授業実践力」「授業分析・評価力」の3つのカテゴリーに基づいて教師に求められる資質能力を規定し、授業実践を通して、それらの資質能力が教育活動の中でどのように機能するかを検証した。その結果、「授業構想力」における「音楽や音楽文化のもつ本質的な価値を捉え、児童・生徒に付けたい資質・能力と関わらせた教材を開発する力」と「授業実践力」における「楽器の演奏や歌唱といった音楽表現の技能を高めるために必要な表現の技能」が、授業を効果的に構想・展開するうえで有効に働くことが示された。

中学校音楽科においては、「授業構想力」で規定した「児童・生徒がこれまで親しんできた音楽や音楽的な経験や体験を基盤としつつ、未知・未習の内容に取り組む意欲を促す目標を設定する力」に着目し、検証を行った。具体的には、生徒が「生活や社会の中の音」に目を向け、音と生活、社会との関係に関心をもてるようにするため、「家のリビング」や「近所の公園」といった生徒にとって身近な「場所」をテーマに設定し、その音を用いたアンサンブル創作をグループ活動として実施した。生徒が自ら身近な生活の中からテーマを見出し、「生活や社会の中の音」を活用して創作活動に取り組むことによって、音楽と生活、社会とのつながりを考えることができた。その結果、生徒は「生活や社会の中の音」に興味をもち、さまざまな音を録音して活用しながら、創作活動を楽しむ姿が見られた。

この実践から、「児童・生徒がこれまで親しんできた音楽や音楽的な経験や体験を基盤としつつ、未知・未習の内容に取り組む意欲を促す目標を設定する力」が、生徒の興味や意欲を引き出す授業を構想するうえで有効に機能することが明らかになった。具体的には、生徒が身近な生活の音を題材に自ら創作活動へ取り組んだ姿が、この力の有効性を裏付けていた

ただし、音楽を根源的な営みとして位置付け、音楽を通して世界をより深く理解し、人生を豊かにしたり、人々の相互理解を深めたりする授業を構想する上では、教師の力量が問われることを十分に踏まえておく必要がある。小学校音楽科では、日常生活に根付く日本の伝統や文化に着目し、それらが日本の伝統音楽とどのように結び付いているかを取り上げながら、児童が身の周りにある「日本に古くから伝わる音楽」との関わりに気付き、そこから視野を広げて様々な世界の音楽への興味・関心を促すことができる授業構想力を高める必要がある。中学校音楽科では、生徒が身近な「生活や社会の音」と自己との関わりに気付き、音と生活、社会とのつながりを実感する姿が見られた。一方で、その学びをさら

に広げ、より多様な世界の音楽へと関心を深めていくためには、教師が生徒の経験や関心を的確に捉え、新たな学びへとつなげる「授業構想力」を高める必要がある。つまり、生徒の生活に根ざした学びを多様な音楽文化の理解へと発展させる授業を設計する力が、今後の課題として挙げられる。

（２）研究の目的

本研究の目的は、自他を尊重し、共に高め合う子供の育成を目指し、「共に生きるための音楽科の授業」の在り方を検討し、その教育的意義と有効性を実践的に明らかにすることである。

（３）今年度の研究概要

本年度の研究では、まず「音楽科でめざす子供の姿」を想定したうえで、「共に生きるための音楽科の授業」を小学校および中学校において構想、実践する。次に、実践授業の映像記録をもとに、演奏や奏法の工夫、発話記録、授業後の振り返りを分析し、児童・生徒が音楽を通して他者と関わり、共に学びを深める過程や、そこに見られる変容の特徴を明らかにすることで、構想・実践した授業が「音楽科でめざす子供の姿」にどの程度迫ることができたかについて検討する。

【引用・参考文献】

スワニック、キース（2004）、『音楽の教え方 音楽的な音楽教育のために』塩原麻里・高須一共訳、音楽之友社

今井康雄（2019）、「学校教育と音楽 なぜ学校で音楽を教えるのか」、日本音楽教育学会編『音楽教育研究ハンドブック』音楽之友社、26-27.

中央教育審議会（2021）、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」、インターネット.https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm.（2024/10/29 にアクセス）

文部科学省(2018a),『小学校学習指導要領解説 音楽編』東洋館出版社

文部科学省(2018b),『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社